13
2132

山津井

斎藤文庫

人ハ万物の長なり。万人ハ万ド
ばかり。上戸ハ下戸を梨。上戸乃
肝ハ好ハ徳なり。下戸の肝ハ婦を
大なる損や。各人極く富貴なるも
あり。貧。大気の人貧なるも極く
貧窮ハ天なり。人なるべし。故ニ
おもたる事ハ家耳ニ小の損
も事なるや。是を思ハバ唯世の中

7
13特
2132
7

斎藤文庫

年。一日蕚乃かゞ稽古まを請て
もゝをびゝ。はゝ〜〜られてもあるゝ姫
外ハちゝ〜〜と。石斗椿姫の元を勝手
を。はゝ出たのと形く書とゞ免くゝ。ものや
〜〜ちゝ代双紙を。百椿と和世よ姫椿ちゝ〜〜

安永八乙卯年

爽のゆ

時雨庵主人戯述

百安楚花

金銀采幾ハ国の宝みゝ〜〜ゝ。家写栄
神佛ゝ奇進供養〜〜分貝ものをゝの
ゝ稽ゝ。乗の養食生を才一ゝ〜〜。衣食住
を。其分相意ゝ〜〜ゝ寒暑を凌ぎハ
人の種義をゝく〜〜ゝを。金紙ゝ写る人
亦金紙のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ小金紙
を神佛より重も。家分ハ句海妻

子眷属ハ石自由をさせ世上の義理を
かき。貧ものハ施るすかく金銀をハ
をきゝ。貪欲ハ多めるものを当ハ
きれバ人の恨をうけ金銀何程あるとも
其ときゝ又無時ハ石瓦ハ元ゝ——地上
ハ瓦石を積おきて畫扶其為をゝ——く。
んをゝ。ハ——め。あばゝゝゝ生涯をゝく
きゝてゝゝ。是を金銀ハ富人とゝきんや。

都て金銀の為めるハ方をはゝうがきの新や。
又分の業ハ此ハ里奢ハ長ゝ——無益
ハ老ひきつ強ゝバ仮万為の金銀も小の清
ハゝ消ゝせ其上ハ邪金銀ハ多くきひ多ゝ
男更ハ人の金銀を借分の時まゝゝ堅。
果ハ人をかゝ命まゝ或ハ盗人とゝまゝく一命を
きつるも。是ハ赤金銀のゝ以所や人参紙
人を活——。又人こゝ以の新や依ゝ慎べき

物のあはれおもへばこの世乃中都も鄙も後金
銀形くるこ汁時もいとかなしひこのくるし。
先祝毛のくるしきびくく去年より絃る
雪のむくら門の松風おとよく寒おぶぎ
くゆめ夢ちぐの和室舟秋松りうまーさ
四五とゝ塞の月くんえくこ汁言も昔よ
里今かつくるーき変の系物
くさてまさいさ抑亦傾城の待ハむのーハえりあ里

ーおのちのきこころよ里二日ふなるう。家くの
掛の仕業花をかざ所。其中ゑ乗ハくふ
一日釈方よ里の木綿仕業をいやがるく。
子心ゑ如くるる白性手もおくーくものん
きくくる乗ハ是を配くぼろく後を
さぼももくもや其家の大文を差ふ
ゑて。部屋持秋造二行ふ形びるる者
老手添ゑ性なる。女房をぶーー縁ある

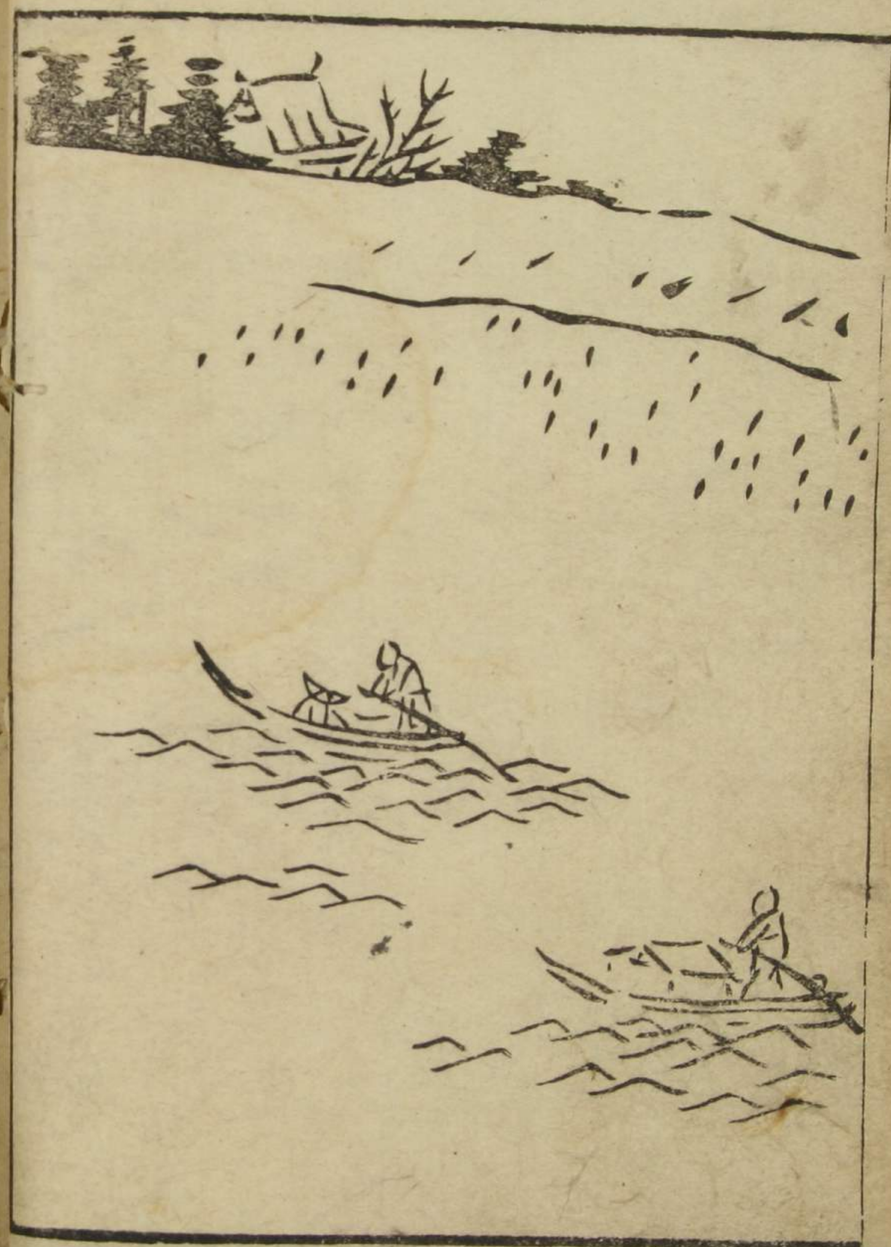
中ハ老女一人列をもぐ〳〵ゝ曝屋を
のぞくおめでゝふごゝまんゝゝゝふもや
まるゝくおの〳〵三日より八傾城も来も
ゝゝのの小袖客よりのもらざきまて金
銀をちらざめゝふの源向をのゝゝゝひ
ゝゝおゝゝゝゝゝ恵かつぎゝ是を跡恵小
袖とゝふやゝ紗束の恵ゝ茶屋毋宿の祝
義ゝゝゝゝ金紀のもゝゝきゝゝ眼の前ハ

高賤をあゝゝゝゝの〳〵鳥巡大神
糸ハ勿論年越毎ゝ狐の面をかぶり色
〳〵の扇を〳〵ゝゝ舞歩行家毎ゝ十二
朔を芸ふ六のゝゝの抱ゝゝれバ丈年
の仕合ゝ〳〵きゝゝゝ別〳〵ゝゝ傾城禿
形ゝゝ器をいやゝゝゝ迎ゝゝゝ何のハゝれ
やゝゝゝゝゝゝゝゝを狐舞ゝゝふなり又
元日の初明七時分より鉢を高ふ者

おびゑ〳〵しく入こゑ。賣歌行き声も
きゝしが。夜明るゝ程なく其もとゝぬ
なり。是〳〵余国に形き初例あるべし。
扨舞妓の事狂云ハむかし〳〵ある首
我ゐ極〳〵をたちのきこゝ侍ハ正月も十五日
南〳〵ハ白〳〵尺を物云を持ち〳〵神物云
のおゝ形ゝも。勝ゐばくのゝ内
神ハ物金紙の理屈也又ゐ〳〵えゐる。

加南〳〵宝引ハ神事のとゝ何ゝびもの
なゝゐ。ゐつのこゝろ〳〵おゝ形物糸云
ゝの出来ゐる。お花とゐふ女のゝ〳〵
出ゝ〳〵拍のよゝ〳〵。元ハ酒宴の興ゐ
ゝゝるを。後ハ是ゐ金紙を掛ゝ勝負
を切〳〵ゐふ場亦変のゝ〳〵ハものゝ形。
少物がゝゐゐ部や〳〵きをゝる。身代
を捨ゐ〳〵ゝの教ゝれぞ。夫さへある

おちのまこ語めくうとれいか物時分日ゝ
ゝ人ゝくの心をかやまし。虫もさうさぬ
やゝ隠居。又ハ世乃中を絶思ひ離れ
多所後宝。ひとひハ子間より里まをゝ
く勤。女ゐおゝけ口いをれとも都をひう
めはやゝか。廿間とゝびの奉公人も。おの
をゝ一寸多を出ゝ。二百の母
所ち銭が四百ゐおゝくさゝを。孫ゝもさ



見るも怖れの余てぱおゐ大なる病の
ちぢぶこと形るせおのめりとふ物何国
より里精霊生しるる形もちをきしば。
此中ゐ鬼ふ物あり。是をとりて
やーーぱくくおの鬼を見んをを形ふ
何のいち物やん。是を見ぱ。ぱまふ
女の鬼ゐ里ふ沙汰して。
其こ話是を見人群集ーー。

一生涯くるる人もなくぞ八蘭詩に
こゝ是。京ハ世の中ゆ一きやまん日行く。
人多く損じ多里といふこゝのう。今
おの名ゆ乃名めるぞ一なゞ度ゝち
口論一ぞゆ一ひハ暗心の病ゝなう身を
ゝゝしゝものあるハ。彼はれくまゆ人多ゝ鬼
の業めるぞゝゝぞゝゝるゝゝ一あゆ
ご一。京寄かゝるくハかゝご一けゝゝも。御門

の御制衣。御上雲客の詠奇をゆつめく。
やゝゝゝゝき上蘭の ゝゝあゝゝびの調度せ。
ハゝゆゝんものハ身をゆゝゝゝあゆゝを清め
吟ゝべきゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝを。ゆの形る者ゝ仕物一
ゝゝゆやゝんむべ山ゝゝふゝゝゆゝく。寄かゝる
さをゝゝゆく金銭の嫌員をゆゝゝふ
物変人の趣向ゆ一ゝゝゝゝゆゝ形一き
ゆゝびをせんゝゝ。是ゝ思ひはゝ一

その神宮をとゝのゝ人くハ國土の罪人なるべし。きさらぎハ稲荷の祭乃大皷天地ゝ動ぐ。何國へ行くゝも。絶間なくハ神玉のいさゝ。せ。和白の幟ハ紅葉うつくしゝかづく。夜ゝ宮のゝもしゝ火ハ水の間ゝ。ゝ。赤梅の色をゝ神前の供御ゝ七五三五々三ゝ金銀の俗をかぐ。

中ゝ鱈ゝ。ふ魚世ゝ賤。ゝ。ゝ居酒屋の鄙ゝ魚ゝ。ゝ里ゝ。馬士船沃の岩人ゝ。ゝ。ゝ。

とゝく寺のまぎるゝ。彼岸会の幕張。
腰巾着より星投る賽銭。佛ゝも金銭ハ
好まゝふゝんゝく。黄金の唐を移ごひ。
簡浮檀金を最上ゝ——。極乗浄土を
金紙を鋪ゝその中。是彼金銀の宝ゝ
ゝ絵多。やゝひハ空のゝ——紀も驚
か。山も里も一面ゝ花ゝゝ咲加——この
笠尺移山。先向嶽のまぎるゝ。向ま

さかる茶屋の中ゝも田乗ハきのえゝ屋
ゝ名ゝる鯉ハかさゝゝ六帝大黒屋孫四郎
を最上ゝ——。三国山の絵馬堂ゝハ兵角
ゝ雨屋の紋匂を狩ゝ野がけ遠無の
ゝ阪京ゝゝゝハ五十間さゝ馬をはちゝ
セちゝゝと枝廊尺絵と大門を這入屋
茶屋の暖簾を駆ゝゝゝ。内儀ゝる
ゝもかいうとゝゝハ。女房立生ゝくゝ尺

おぼへもなき都おかぐら。是ハ〳〵お久ー
ぬりうるくよふこそ参りお出ちんー〳〵おうハ
さぞの里とふきちんー〳〵とまざく少
ーとうおとをつき形ぐ〳〵拵るようをや
く女ぐ盃を拵出。一つ二つのをちうぎの
一分を取ちやや女房蔵つきどこぞおん
ゆてぐざざ里んきち。きく〳〵せく〳〵はこのハちん
ーやうと傾城と地婦と半分まぜの云

葉ぐうおるんうく〳〵ーいやく〳〵折
絶ちの地へ来ぬ心尚かとふハむのー
のる。今宵ゆく〳〵お妻をさぐあようハ
さとく〳〵ばさよふおく〳〵もをや廊も出まー
とこのうごろん拍おさまませ。長助かちん
挑灯はけくお借さつーやおと。おち
おちちふぐふくぬ縛ハをやくおい出ぬー
やうふーうくかをハをや鼻唄おて。武士

のゝまゝ——ゆ一寸もひろぬ乳ゝ形ハ。意
八曲ゝの傾国のまゝ——なゝべ——。此家
一人ハ三年二十五ゝ。髮大ゝ成ゝさまゝく元結
沢山ゝまゝく結。淺黄の五分長ぢぐんかいき
結の下着。黑小袖。とくぎたくのえで廣袂
帯——を四角四面ゝむすびゝ。黑繻子の綿入
羽織白糸ゝまゝくぶ——ゝまゝぬゝ紋——。
紋。ぢ緒ゝもゝ紫糸也。一人ハ年五十ぢの里

肌ゝ赤ゝくゝげ髓ふ——細ゝ。かぢ色のぢ
ぢん。小仗の下着。黑小袖。丸紋後の帯同
袷羽織玉虫色の茶丸の裏ゝづまも白き
足袋ゝ。巾貫ゝ草履をゝくゝ——ゝ
袋中衆ゝゝん。扨ゝゝあちゝ尺
ゝく歩ゝゝゝ。茶屋の男ゝゝ。
内ゝゝめゝく上。客ハ廣袂ゝゝく
茶屋のゝゝゝゝゝゝ三人ゝれバ。ゝ所ゝ

まゝひ床の間乃きゝ拾る。傾堆の拾る
所あれバ茶屋の男気の毒ご里ハの内
みゝく笑ひあごゝもゝ川とこちゝあ生て
あされませと指一所をかゝる。傾城の出
る傍く客ハ大音声みゝく。昼おあ里
ゝゝと尾を尾ゝを法けく吐一尺へを
いか。又三四年程跡ゝちゝ川と来ゝ茶
屋のゝゝ。くハ一尺ゝを知ゝゝゝゝち

十二

の内儀ハいつゝくゝも笑ふどゝも所ゝゝ
しやおゝ婦く話ハ加ゝ法るもゝいゝ
ル易ゝゝを吐ル。ゝの座一きのやゝを
ゝゝく笑者も。ゝや吟のぬゝんざゝ
男ひ。傾城も廊下をゝゝ里ゝゝゝの
ゝ歩をゝゝ里と見るゝゝみ。座敷へ出
やゝことの外おゝゝ一。笑ゝのみゝ川
ハまゝく出ゝゝ。何やゝ外の

十三

傾城と吐ーー。小声にて笑ひながら来
て座敷へ這入とまりこうともせずば
ー脇のかたを向て指る。此時客人
今まで云る声ふかく吐ちらるゝこの外
小声にてかるや盃ちゝく茶屋のおとこ。
さのごとくいきとのいてせんとぞーめて
傾城の言葉出る。其尾をとつつき茶屋
の男ーー。ーー英さぶく傾城を

笑せ。柔れをあぶらくいやがらせるのかく
へも色く吐ちるのけて云ても。色角者
めけをふまへ。座敷をかこざて。傾
城とあるの間一向無云や。客人あまり
多持あきまへ指子を朋連の男と天気
のうさと。翌日の奉公の番ぐを出
るく小声や茶屋の男にまり気の
どくさる。ちゝけと内へ入せるまい宝

南ふと。提灯とぼーちおぐら釣ハとの
ふのこまぼとふふく帰る。客ハこの糸
おとひーー茶屋の男帰ハ。水から落
ふ南猿のごとくぽのーーちおぐらぐまつを
拾ふも出まぬ出ぱハぐちおぐら傾城
ホ吐出のけふくえまバ。傾城ぐーー部を
見合ふりはふふぬちやふーぐみ。
あいふぐの里屋んぐーぐまれバ二度とのも

いふ猫ぐ酒だの里のんぐ拾ふやたまを
隣座敷のふふ見もバ。蚊帳の明障子
ホ移。図西だのふ扇ふくふくうぐくやふホ
見えふく。扇子の音乃ちちくふふ
庭吹の音乃のふやふ者心えお球を
おさあんと座ふきを行ふと傾城ハ下へ
行や禿猛を呼ーーおぐふ来ハ。後ふが
むろの脊巾を角きこむまあ孫高

の名ハあんとふと尚へバ。だそうーーおあん
乃こゝへきまんと法ふど移く京。
イヤサ今まぐく爰ゝ居ゝまゝい所移さ面の
ちゝゝとゝへバ。恋やゝく合点ーゝく。
おいゝぐんのかへ。丁山さんとゝふきん
とつふ。彼者この御ゝ解ぜゝ
ふし男儀ゝふか白をーーかゝゝ。脇ゝふ
山ゝかくきゝとゝゝ移ゝとゝふ。京ゝ

幣ーーゝ法師をのゝゝ丑ゝ二人ともふ
ことの外碎。さゝれゝもさゝ山寺のゝハ
風ゝ。おく産者ゝ太夫来里儀太夫の
三絃ゝゝ。ゝ年ゝ。彼年ゝおゝ
心元部ゝく。あゝのもーー田中
のつが移ゝ。ゝ調子ゝかゝハ山寺より
ハ罷おゝの面べーー。ゝ後ハ何とやゝん
ゝゝゝ心ゝゝかきゝのゝさ面や。金さゝ

生ばば傾城とふものハ家自由なる物
といふべし。大ふるう筒遠ざかるべし。
卯月ハ卯の花量とゝく空もうゝ
ゝゝゝ小。時鳥の神声千金もかえ
ぬ。此月ハ所〳〵ゝ閑帳ぐ。
奉納の提灯ゝ傾城と役者の名ゞ書け
まゝバ滅〳〵。のるひハ山変ゆゞ細工の
ゝゝゝ人ゝ。又ハ番量の絵むきをを

巫女ゝゝ生ゝゝゝゝゝ。傾
ぐ卯ゝ見ることの形ぐゝゝゝゝれバ
のづゝゝゝこゝ。時行ぬゝ
ゝれバ。佛神ゝゝゝゝ唯でハいゝぬ
中。ゝゝ田舎ゝ里。ゝゝゝゝ
和尚のゝゝゝゝ素ゝゝ閑帳佛。江戸の
勝ゝとゝゝ閑帳師ゝゝ捨ゝゝ
ゝ。奉納の提灯ゝ其卯上物ゝ。原

野町へ、このむすをとゝ、ばゞ、先より上次第
ゝ、れば、つまゝ、信心ゝ、上るものハ
まれゝ、大方名をとゝれ、夜ゝ
ゝ上るゝ、ゝれば、ゝ同ゝ、ほどの
物も上ゝ、ばゞ、このゝ、形ゝ、霊佛ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、日ゝ、ゝ泉、諸の人さび、
肉、喰ゝ、こゝゞ、ゝ、借銭の渕へ、ゝ、
ゝ、ゝ、地代の滞ゝ、帳佛、霊宝の品

くを質ゝ、取ゝ、強ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
物ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、帰ゝ、且彩を集金子やゝ、ゝ、
ゝ、佛ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
さ里、神佛の信心もゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
なゝ、さ月ハ彩の菖蒲ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
のいゝ、粽ゝ、ハ餅の使大地ゝ、ゝ、
ゝの月ハ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

叅詣の人群集。信心ふかく仏ぶつ三ぶつ諸ぶつ
ゐ里。護摩祈祷の御札を配布。神尾の
同縁ハミ形金紙のうへ見をゆるしたまふ。
梅雨降はるゝ徒然をなぐさむまハ。詩歌
連俳香。鞠。立花。かげ入。揚弓。盆石。碁。将棋
かど。其人くの好所まく。終日の業を
惜せ。先詩人ハ。はるゐまゐ見るもはき会
さるもかなるもの人をそ。赤ゐ白

杜子美ぶんをまくれ。弱も唐人の気ふ成
大ち唐机ゐ色やくの唐物を集ふくか
ざ里。庭ゐ投掛芭蕉を植。九窓を明放ハ
大形る扇をさゝこのさ清みさ——。ぎやまん
のさつぬゐるく酒をのこ猶云ぞうゐ里ハさそ
ゞかゞ伊のくとゝもいゝられぬ丑へゐまやゝこ
ゝふくまゝ仏ぞ。朝夕四角ゐ文字ぞのゐ里
尺ゝ。天地のてゝる里自慢を——く

多の一ことさそふハ品川の一かゝ赤川へ
者ガえ一ゝく。南へよりほとちのくち
つゝと怪ぶ人も是ゝの事かるべ一。好まぬ
人の眼うつハ多まゝく　日本の地へ生生ゝく。
色ゝく形ぐさまも所る中まゝぬを添
さ一のきれを一ゝ怪ハ大か多るけも
のと思ふかれぐも。是其人の好所平書
れをかぐさむる所をびや。赤哥よゝハ心る

ちよりとゝ一ふ色紙の文神まもむの一
物語の名葉を書入ひるひハ定家の多跡
を似ぬ所ハ誰様の御門ちうと言ゆう哥
よまぬものハ人外のやうみ乃下一人の
う物あるを聞てハ結ぶ見ると怪び。
逃善の歌を添ゝるものの一是ハ誠の
哥人まハ毫ゝるすや形事中の哥よゝのてす
かる。形毫月ハ両国秋地の納涼樓新小

先京のうひハ布交の幕をうち色種を
鋪ちく川風ゐむるゞ〳〵る三絃の言葉。
偖舟ゐハ筏かゞ里の江樽を乗るいき
ちゐれの屋根舟ゐハ秘云者の笑ひ声
波を清くぬく拝ゐ入るハ四季庵樂
唐をたゞめ〳〵もし一火川も岡も一面ゐ
暫天の星のうゝかゞれ中洲乃花
火ハ金銀をとりうく水中ゐちげうつゞ

ゞ〳〵。上陽理踊声色いろくの
秘云をあゝそふ。ゐまゝの樓船を取き
小舟ハ大河の水色を加くゆ。其中ゐ
たゝう離てくう船方。船舟ゐハあ
三絃ゐく。十二三のむすめの声ゐ降むむ
ちゐあうとふも。狂ゐハ我ゝれ〳〵かゝん
とゐを絞ゐ思たゝせやき大うゐ
ぎたれ火〳〵と賣まゝ高買舟の

声ハ。板の文ホ赤さのひろく林ー。文月ハ
星祭ヲ貸ホ袖の菊せ。とよふ。今宵一
夜の曠乃出會ヲ。世界の小袖を備義
ーーを為めーーも所つさと尺ゆれば七夕も
よりほとを乞ど為ヲ面ハ赤ハきれを掛
炊ハ誘ハ佛前の物ヲ。いつの赤誘
ようう中の所ホ少ば。ー始。色ノくの画
向を乗ーーかうの人形をあーらく。

里のおぎうを為と形うぬ。能傾城ハ茶屋
まぐ出る。少びの者前後ヲ付き。ひ
多提灯を高さ。ーーのげ。群集乃中
先をうひ人をあーーーけ。所里の為
ちぬ八文字ハ。為ふを泳陀の素迂ふ
も高。ハうを高る者も為ちま花かつぐふの
ハおう里。ハの傾城買ふのあぬ賤ヲの
ハ。思ちび心の内ヲ佛名をのふるる

ありれば佛前の物を中の町へとぶらせ
もとつともや葉月八月ぐ帷子の世の中
ゆ。吉原ざくの里白むく着ハいうるる沢
やうんちらしび少アまぐく錦のもち我
を乞るがへーさるも。られ白魚へと降積
ー雪のりーなハめづらーき世界
ありつ。十五夜の月ハ。ーきくの
進物物者ゆ芸をやぐ里門前ゆ市

をあ ゆ。るも賤も見も。今ゆ青のるくをめで。
詩を作哥を詠じ。数句を葉ば。
書樓のゆぎるゆハふもさらや。煙爰
のかざるもの。稚云者。ゆや。ゆ。子供程云。
歌おとらじと。ゆるふ。ゆの秋ハ所そ
乃稚云者多入こむ中ゆ。ちのきころハ
ゆさ山多。志ゆるも稚云者の中へ
まぐ里ると。おゆ。ゆ。ゆるよー。

是書物盤栄のさま〳〵や菊月ハ
菊づくしの節句。又大菊中菊乃
花の會。ぶんゝ義をはくゝさま
いけゝ錦をかざりぬ。このたゝこゝ亀井戸
天神へ奉納の菊諸家の名義を
集や。亦吉原ゝ燈籠ゝくゝぶらゝとふ
ゝ所里後のちくゝ人ゝまぐくのゝぎゝゝ。
其ゝゝゝめハ伏見町小稲荷の宮有。一年

其祭禮ゝゝくゝ花ぐゝ　ちゝゝ出ハ是より
引ぢゝゝ小ゝのの催。年毎ゝ所ゝゝ里。
中の町ハ茶屋ハ家並ハ。ゝゝやゝかゝる
幕をゝゝ。ゝ拙灯燭竜ゝんゝゝの
ぶゝゝ。一丁〳〵ゝゝ里思ひ〳〵めぐゝ
ゝゝ趣向を楽ゝ。益量ゝぐゝ
ゝゝ新造衆をえゝゝゝく。夜裳ハ錦
をかざり里。女衆云者ハ髮を切ゝ義衆

の姿ゝ形ゝ。天鵞絨錦。硝子かゝの類
多――を持。ぬのゝひいは柳子みはゐてきやを
を云。赤や黄ハ小作花をかざる。こゝ
花ゐ紙云を――こゝ。上物理太夫を――
かゝの名人を揃ハの顔向ゝけゝ江戸
町いつも賑ゝ。ぬのゝひハ白いこゝちなど。
其日其時の思ひつきゝ色く笑を
ゝふゝゝや。神無月ハ茶の口き。

数奇屋。囲の高塀。庭ハ松葉を――記。
戸樋竹。灰吹。まゝく青糸ゐ。ゝ。ゝ。
茶碗一つゐ子金をゝ口切の曙と
ゝ。茶の湯ハ流義色く。ゝ。一
やゝゐ。定――。其中ゐ手家々
古流ハ多。搭別ゝ思ゝ
ゐ里。裏表ゝ――何ゝ好物など殊勝也。
ゝの方ハ前ハ――ゐ。

一石一刻遠邪ハ磨ノ〻更好くまふ茶小
も。猪樽かる物も所のり之ず亦面白し。
扨料理の三十七菜。二十五菜かどつふ。
定まる法式もあるるすや。会雪席ハ。其人
其時のおもひ法紀ホ之ず趣向をと
なり。上品とふハ献立の楽しのふ
あるべ。半一其日の為乃好所とこの為
ざ所多をあふ。其容の口ゐ合よふホ

趣向をとるるの肝要也。是紙脇をり
る。薬の的中まるホ之ず。一茶を
以る方病治しかるきホて知るべし。
亦所ま里深く楽しめづるしきるず
をさのる。其魚。其物の形を保し。何
やる知まてあるふるまるハけるるや。亦人
の性ゐよ里。至る嫌の物もなるるすや。
茶の湯ハ以るへよ里貴賤の為

て形く茶會をもうるあれば。うけてもむ
角——をほどこしをむきぬなのをびなり。
れ小尚世の茶人ハ。家形をうるぶり。人を
居ハ——。他流ハ白洛月流の所へ行て
も。茶の湯をもうく門をゆるやいかや。
是ハ異立前。會席の善悪く樂を
うれるるふ。ゆのかるんやうん仏乳形を
るゆ也和町家をもうくハ美義子樣ゆうく。

廊小屋をお移しハ。雪ハぬるゆ茶
一ちい婦るまハぬ所まくも。鯉の子はけ。
海嵐の小角くを小を。来ほどの人ゆ酒
ふるまふハ。拾言文だくいとやくふく。一
年中ほどくくとをはるて
金をあけるるハ。此時ゆるほるや。
吉原ハ廿日を表向の定日ゆ——。又
内所の恵夷子樣ゆるハ。傾城のう樣

と。秋方のうちと二度ほ掛ふかるべし。
紅葉見。拾聖見。おもしろかるべく廊の
おぢまるゐ。炉の竜のうハ気。茶。釜道買
のいきるとと遠ひ。朝帰の賤もいとゝ。
傾ちいも客もきりはるゝ。雑乃
坊ゝび。根引の相談の出来るも今かゝ
のるゝや。嘉月ハいま井多。髪おき。ゝ
長。常ゝきふ。抱ゝ人の神かく所

丈の長小袖を自慢ゝ。はきゝふ釈
ゝちもよ移ゝおひかざ里くの神をふで。
信ゝ仏ゝ大方ハ拾山や芝居の白足
ちハ人よ里先ゝ見ゝるを行ゝをひ。朝ハ
鳥見丁。二日ハ吹屋丁。三日ハ木挽丁おどく。
毎年新例のやゝる浅草を敢。朝日の
浅草の下札ふ。茶屋。立物の役者。太夫元。
金元の名を書ゝ所ハ勿論なり。

ちのきちろハ。俳諧師の名の尺へるも
おの〳〵。表裏の葉ゐの隙掛おゐく
の葉〳〵を〳〵ろく。俳うげ雲みそびへ。
縫物尺ぶ川の人。波のぎく押合ふ。
おの釈ハ子供の切迫も〳〵〳〵回縫く。
一番太鼓〳〵と。女中ハいろく。
釈の目を孫ぎ〳〵〳〵の尺掛。夜明を
尺れバ霄かけるいろ白彩もところく

ちげろ。朝風の立ろ自異の先の赤ふ
ゐ里〳〵ろハ。ぎへ佳む花の面影もおもひ
やろ祭〳〵おの〳〵。翌日ハ役者乃祭。
麻上下ゐろく葉屋〳〵を白里。晦日の
釈ハ雑煮を行ふろ釈れバ。二丁まち
へハ正月ゞ二度来ろやろ〳〵ぷろやま
〳〵尺白祭ゞ大晦日のゐろ〳〵こも
二度ゐろべ〳〵と。是ろ〳〵ぎ〳〵真さ

めぐる。亦此月酉の日。鷲大明神乃
祭まつり是を酉の町とふ。運の神なり
とく貴賤のうちあく。武士。町人共ハ
男女の藝者。大通の人まぐも多り諸
ものゝ。理性奥。河里。亦芋
沢を産とす。今青楼へなつち庵
又ものの一枝なるゆ。彼芋沢
多入こむや。極月ハ朔日より暮季後の

たやゝ音せハ一ぱ。煤拂。餅。古
中小紙一文奥。待道具。浅草乃
市ハ。江戸田舎の人共小ぶ群集
也。歌音の賑ハ白雨の降きるが
ごとくにして。さるをはけしくと。若
狭ゆく商人の声ハ。歌年のせのるハ
ものゝ来る声といさゝをあす。
むの一ハ。物買人くも雑ものを好。

多の中まくるうり出しを買をよ
しとした。今の世乃人ハ気性大小遠。
何一き物まくも價安物をたのむ也。
るうり物一のらばものをよしとした。
故小商人も通まくい。今賣始るものも。
きまひを所けくくとつかせ。亦家ゝ
の年忘の。茶碗盃云小矣をもつけ。
廿日ゑよりハ吉原の廓引ぢゝ

の客ハ妻侍お被。だのゑ若小袖のもよふ
を工夫ゝ。衣配のむこのしも思ひ出ら
ゝ里。こゝ社ゝくの時節お意の
何をびかゞふるまゝ面おく年中
絶る記まゝ。あの世界の多乃ゝ矣。
彼金紙おくくハ一つとくかゝひ
でゝ人の何のをびを尺ゝ里。聞ゝ里。
謗多きも。家力お及ぬ也へなり。

恋も。無常も。活死も。身の幸も。神
佛の力おおよぶべからざるも。金銀さへ
なくば。大方地の明世の中。唯捨ごろき
八金銀やいなへ。姨を捨てるるの所
里なく。姨捨山とふ名所となる。月の
名めを。孫ぜられ。子を捨る人多ければ
古歌。諸国津々浦々。傾城捨
女の数なる。砂よりも多し。金

銀といやーーこ。捨てるるふ人をいまぐ聞き
うべ。嗚呼孫がーーな物ハ金銀やと。
人の思ふん所もいとたべ。銀ふ
なるびるもしぐ。ぬ捨びぬるを
書なつめる。銀矣の種 みあーーぬ

仙遊記

以本里孔塵　近刻

近刻

板元

江戸橋四日市　竹川藤助

本所押原五丁目　半田屋源三郎